

遺跡の民俗学あるいは伝承の考古学 —重畳たるモノとコト—

THE ETHNOGRAPHY OF ARCHAEOLOGICAL SITES OR THE ARCHAEOLOGY OF FOLKLORE: MULTIPLE LAYERS OF TANGIBLE AND INTANGIBLE

角南 晴一郎 (神奈川大学国際日本学部)

SUNAMI SOICHIRO (KANAGAWA UNIVERSITY, FACULTY OF CROSS-CULTURAL AND JAPANESE STUDIES)

考古学 / ARCHEOLOGY 民俗学 / FOLKLORE
 有形 / TANGIBLE 無形 / INTANGIBLE
 物質文化 / MATERIAL CULTURE

1. はじめに

本論に入る前に、遺跡とはいかなるものか、伝承とはなんであるかを確認しておこう。まず、遺跡 (archaeological sites) とは、遺構と遺物からなる人類の残した痕跡である。これは考古学が調査研究の対象としてきた。他方、伝承（英語 folklore、仏語 tradition populaire）とは、それまでにあるものを継承し次の世代に引き継ぐことを意味するだろう。これらは民俗学の対象である。一般的な考えでは、遺跡は有形 (tangible)、伝承は無形 (intangible) ということになろうが、伝承のカテゴリーには民具などの有形物（伝承されるモノ）も含まれる。以上のことを見整理すれば、民俗学が研究対象とする伝承（有形・無形）と考古学（有形）が同じく研究対象とする遺跡となるだろう。現在は距離ある両者ではあるが、実は無関係ではない。そもそも前近代までは考古学、民俗学は未分化であったが、近代以降は西洋からの影響もあって、明確に区分されるようになった。民俗学の父、柳田国男（明治8年〈1875〉～昭和37年〈1962〉）は初期、考古学に関心を持っていた。古墳が築かれてから今日に至るまでの民俗上の変化を重視するようになった¹⁾。そして柳田は、伝承が消えると塚（古墳、古墓）が破壊されてしまうことを指摘している²⁾。柳田によるこの指摘は考古学にとっても極めて重要であると考えられる。

その後、社会的状況は大きく変化し両者の関係は希薄になっていった。それは双方の学問が確立し発展を

するという意味で、有意義であったかもしれない。しかし、文化財の活用が声高に呼ばれる時代、両学問が相互に乗り入れる「遺跡の民俗学」や「伝承の考古学」が求められているのではないかと考える。そこで本稿では、以下のようなトピックを順に紹介しながら、両者の関係を考察してみたい。①研究史の回顧、②発掘調査・埋蔵文化財調査報告書と民俗・伝承、③現代社会における民俗学／考古学の協業、④発掘・遺跡が語り継がれるということ。

2. 先学に学ぶ

(1) 自身がこれまで考えたこと

まず筆者自身のことを語ることからはじめよう。考古学から研究をスタートさせ、民俗学に分け入った筆者は、先に述べた両学問の関係についてこれまで幾度か検討を試みてきた。これはひとえに、前職である元興寺文化財研究所での業務内容が、民俗学、考古学にまたがっていたことから可能となったものである。筆者がおこなった検討とは具体的には以下のようなものであった。墓にまつわる伝承、伝承にもとづく墓に関して例示しそれらの関係を論じた³⁾。古墳の上に建立された祠、神社を手掛りとして信仰の継続を考えた⁴⁾。中近世の石造物は、民間信仰の対象として読みかえられることを考察した⁵⁾。

こうした作業の中で強く感じたことがある。それは考古学者が民俗学の研究成果を援用することはもあるものの、逆はほとんどないということである。それには

深い理由があると考えられる。その理由は民俗学における物質文化研究への関心の薄さに起因するのではないかろうか。

(2) 前史としての坪井正五郎、東京人類学会

民俗学、考古学、民族学、人類学などが未分化であった明治時代、東京人類学会の活動を通じて、これらを総合的に学問化しようとしたのは坪井正五郎（文久3年〈1863〉～大正2年〈1913〉）である。坪井は近年再評価されつつあるが、各学問においてもっと参照されるべき研究は多いと考えられる。本稿で問題とする遺跡と伝承の関係について、最も早い段階で科学的検証をしつつ、伝承を無視することなく取り上げた学的態度は見習うべき点が多い。一例をあげるならば火塚の研究がある。火塚とは以下のように説明される。昔、火の雨が降り、人々が塚の中に隠れて難を逃れたので、その塚を火塚とか火の雨塚などと呼ばれている⁶⁾。火塚についても最初に学術的な検討を試みたのは坪井で、続いて柳田国男も言及をしている⁷⁾。その名称からわかるように、火塚は開口した横穴式石室を有する古墳と関係して生成された伝承である。坪井は「火塚に関する疑ひを解く」で、以下のように伝承と古墳の関係を紐解いている⁸⁾。

次に類例について云ひますと諸國に似たものが澤山有りますが其稱へは等しく有りません。只駿河の某所に於ては此の如きものを火雨塚又は火塚と呼んで居ります。これは富士の噴火の際、此所に火の害を免れたと云ふ所から斯く云ひ出したので有るとの事で有りますが、豊橋附近の塚に火塚の名の有るのも斯かる傳説か若しくは斯かる事からの類推に由るので有りませう。駿河のを始めとして諸地方の類似遺蹟に付いて調べて見ると土を以て覆はれて居る塚から、石の露出して居るもの、前部の石の無く成つて居るものに至るまで種々變化の中間物が有つて、石室は元來口の閉ぢて有つたもので有る事誠に明かで有ります。

火塚（火の雨塚）については坪井の後、民俗学、考古学双方からの論考・報告があることが特徴といえるだろう⁹⁾。

坪井の時代は遺跡と伝承の関係は表裏一体であり、

ある意味理想的な関係ではなかったと考えるのが妥当だろうが、それでもその頃から複数の学問の対象となっているという雰囲気は漂っていたのではなかろうか。坪井は考現学を提唱した今和次郎（明治21年〈1888〉～昭和48年〈1973〉）が考現学の先達とリスペクトしたように、過去の風景だけでなく現在の様相についても強い関心があった¹⁰⁾。これは火塚だけでなく、坪井の遺跡と巨人伝説の関係に関する研究なども同様である¹¹⁾。以上のようなことからも、坪井は現在を起点とし目前にある遺跡と伝承を研究対象としながら、調査研究を実践していたといえる。

(3) 民俗学を志したあるいは民俗学を好んだ考古学者

東京人類学会の活動で、民俗学者と考古学者はネットワークを形成し、すべてではないものの多くが相互に関係しあった。このような環境もあり後に、柳田国男により民俗学界が整えられていく中で、考古学者が柳田民俗学にシンパシーを感じることもあったようだ。こうした考古学者には、梅原末治（明治26年〈1893〉～昭和58年〈1983〉）¹²⁾、末永雅雄（明治30年〈1897〉～平成3年〈1991〉）¹³⁾、大場磐雄（明治32年〈1899〉～昭和50年〈1975〉）、水野清一（明治38年〈1905〉～昭和46年〈1971〉）¹⁴⁾、斎藤忠（明治41年〈1908〉～平成25年〈2013〉）¹⁵⁾、小林行雄（明治44年〈1911〉～平成元年〈1989〉）¹⁶⁾などがいた。こうした人的交流は、民俗学、考古学にとってそれぞれの学問を豊かにしたと考えられる。学問の対象や方法が細分化された現在では、このころのようにはいかないかもしれないが、民俗学に理解のある考古学者や考古学に興味のある民俗学者は存在する。先に示した事例が単に学説史ということに留まらず、そうしたゆるやかな関係性を構築しこのようすに相互の中で活かしていくかを考える上で、示唆に富む足跡である。

(4) 京大文化史学派の中の考古学と民俗学

京都帝国大学国史学教授・西田直二郎（明治19年〈1886〉～昭和39年〈1964〉）の弟子とその周辺の研究者は、俗に京大文化史学派と呼ばれる。このスクールの中には民俗学者、考古学者、歴史学者などが含まれる¹⁷⁾。先にあげた考古学者のうち、大場以外は京大文化史学派に含まれる。京大文化史学派の中でも神話

研究は学際的な領域であった。戦前に皇国史觀に利用された神話は、戦後の考古学にとってある意味タブー視されるようになった。このトラウマが説話伝承研究と考古学の関係に与えた影響は、少なからずあったと考えられる。

京都帝国大学考古学研究室に近い民俗学者として宮本常一（明治40年〈1907〉～昭和56年〈1981〉）があげられる。宮本と京都帝国大学考古学研究室との関係を示すエピソードがいくつもある。宮本は石造物研究者・田岡香逸（明治38年～平成4年〈1992〉）を通じて、京都帝国大学で学んで本業の酒造業の傍ら在野研究者として辰馬考古資料館を設立した辰馬悦蔵（明治25年〈1892〉～昭和55年〈1980〉）、水野清一、小林行雄らの知遇を得ていた。宮本の提案で戦後の物質不足の中、企画されたのが昭和21・22年（1946・1947）の小林行雄、水野清一ら京都帝国大学考古学研究室のメンバーを中心とした、酒造用具の実測調査であった¹⁸⁾。

考古学者・坪井清足（大正10年〈1921〉～平成28年〈2016〉）によれば、次のようなこともあったという。宮本はときどき京都帝国大学考古学研究室を訪問していた。この際に昼食だといってはったい粉に水を混ぜて食していたという¹⁹⁾。宮本は後に縄文時代の落とし穴の機能想定に、民俗学的立場から貢献するなど、考古学との関係は深かったといえるだろう。

3. 発掘調査・埋蔵文化財調査報告書と民俗・伝承

現行の埋蔵文化財発掘調査報告書は、あくまでも緊急調査の成果として、失われる埋蔵文化財を記録保存し報告するために刊行される。こうしたスタイルでの調査方法は、文化財保護法の制定に起因するものである。しかしながら、開発により失われるのは埋蔵文化財だけなのだろうか。ここでは過去に刊行された報告書を題材として、考古学と民俗学の関係の変遷を検証してみたい。

（1）奈良県教育委員会による「総合文化調査」

埋蔵文化財の調査報告書ではないが、民俗学と考古学の接点が認められるものが存在する。昭和25年

（1950）に奈良県教育委員会が実施した「総合文化調査」がその一つである。これらの調査対象は自然科学系、人文社会科学系であり、昭和25年の文化財保護法の制定を受けてのものかと考えられる。一方で「総合」の「調査」という文言にフォーカスをするならば、日本民族学協会が昭和25年から昭和29年（1954）にかけて実施した、「アイヌ民族総合調査」が想起される²⁰⁾。ここで「総合」の意味するところは、人文社会科学（文化人類学あるいは民族／民俗学）と自然科学（自然人類学）との共働であった²¹⁾。本調査で中心的役割を果たしたのは、文化人類学者・泉靖一（大正4年〈1915〉～昭和45年〈1970〉）であった。偶然ではあるが、後述する奈良県ではじめての総合文化調査に参加した、文化人類学の蒲生正男（昭和2年〈1927〉～昭和56年）は泉の弟子である。「総合」の「調査」という語の使用は戦前が中心であり、戦後は「総合」に統一されていったようだ²²⁾。

こうした調査スタイルに影響を与えたと考えられるのは、九学会連合の存在である。九学会連合誕生を支援したのは、アチック・ミューザムを主催し民具の命名者としでもあり、戦後は日本民族学協会の会長も務めた、渋沢敬三（明治29年〈1896〉～昭和38年〈1963〉）であったことはよく知られている。

九学会連合は以下のような歴史をたどった。昭和22年六学会連合（日本人類学会・日本民族学協会（昭和39年に日本民族学会に改称）・民間伝承の会（昭和24年〈1949〉に日本民俗学会に改称）・日本社会学会・日本考古学会・日本言語学会）、昭和23年（1948）八学会連合（+日本地理学会・日本宗教学会）、昭和26年（1951）九学会連合（+日本心理学会）、昭和39年東洋音楽学会の参加、昭和44年（1969）日本考古学会の離脱、平成2年（1990）に解散。科学史学者の坂野徹は、日本考古学会が離脱した理由として、戦後考古学の中心が日本考古学協会へと移ったこと、「考古学固有の事情としては、一九六〇年代以降、国土開発の進展とともに、わざわざ九学会連合の共同調査に参加しなくとも、日本列島各地で遺跡調査を実施できるようになったこと」をあげている²³⁾。

奈良県総合文化調査は文理共同で実施するという点

で、九学会連合の影響が看取される。奈良県総合文化調査の成果は以下のように3冊の報告書として公刊されている。調査は分野ごとにそれぞれ班を組織してあたり、報告もなされている。いわばオムニバス形式の報告書である。以下、構成及び本論と関係する調査担当者を中心に抜粋してみよう。

○『奈良県総合文化調査報告書第1（都野地区）』²⁴⁾

第Ⅰ班 地質学・地理学 第Ⅱ班 植物学・動物学
第Ⅲ班 人類学・民俗学（民俗学は宮本常一・平山敏治郎・蒲生正男）²⁵⁾ 第Ⅵ班 考古学・歴史学（考古学は末永雅雄・角田文衛・中村春壽・小島俊次歴史学は池田源太・永島福太郎・岩城隆利） 第Ⅴ班 美術史・建築史

○『奈良県総合文化調査報告書第2（吉野川流域（竜門地区））』²⁶⁾

地質学 地理学 植物学 動物学 民俗学（水木直箭・岸田定雄・保仙純剛） 歴史学（池田源太・堀池春峰・秋山日出雄・木村博一・河原純一） 古文書学（岩城隆利・永島福太郎） 美術史 建築史

○『奈良県総合文化調査報告書第3（吉野川流域（宇智郡大阿太村・南阿太村より上流の吉野川流域十ヶ町村））』²⁷⁾

地質学 地理学 植物学 動物学（御勢久右衛門）²⁸⁾
民俗学（保仙純剛・水木直箭・岸田定雄）、考古学（末永雅雄・小島俊次）、歴史学（池田源太・堀池春峰・新藤普海・永島福太郎）、美術史、建築学

これらを概観すると、一連の調査には、民俗学の平山敏治郎（大正2年～平成19年（2007年））、考古学の末永雅雄・角田文衛（大正2年～平成20年（2008年））、歴史学の池田源太（明治32年～平成7年（1995年））・岩城隆利（明治43年（1910年）～平成24年（2012年））といった京大文化史学派の人々が深く関わっていたことがわかる。

平山、末永に関連して注目すべきは、奈良県立橿原考古学研究所の運営には、民俗学者である平山、田中久夫が関わってきたことである。このような方針は、研究所を設立した末永の、考古学を研究するにあたって隣接する民俗学の研究も必要であるという意向を、反映したものと考えられる。

（2）奈良県教育委員会による「文化財調査」

奈良県では戦前から戦後にかけて埋蔵文化財の調査報告書がどのように刊行されていったかについて概観してみよう。大正8年（1919年）に制定された史蹟名勝天然記念物保存法に則り、奈良県史蹟名勝天然記念物調査會が組織され、『奈良県史蹟名勝天然記念物調査會報告』²⁹⁾、『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』³⁰⁾という形で、実施された調査が報告された。戦後も『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』、『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』³¹⁾というタイトルで刊行が続けられていった。1960年代以降の高度経済成長期に、著しく開発が推進されることとなり、周知の遺跡については記録保存を前提とした、緊急発掘調査が爆発的に増加していった。考古学は次々に現れる新知見によって社会的に注目されることとなり、学問自体も活性化し発展していった。

開発されて失われるのは遺跡だけではない。民俗も同様である。これに対応すべく民俗資料に対しても緊急調査が実施され、記録保存のための報告書が刊行された。奈良県の場合、いずれもダム設置関係による水没地の、緊急調査が実施されている。以下、刊行された3冊の報告書の目次と、本稿と関係する担当者を抜粋してみる。

○『奈良県文化財調査報告第11集（大迫ダム水没地民俗資料緊急調査報告書）』³²⁾

概説 一、食・衣・住 二、生業 三、交通・運輸・交易 四、社会生活 五、信仰 六、人の一生 七、年中行事 八、口頭伝承 付 1、入之波民具 2、入之波文書

民俗学（林宏・平山敏治郎・水木直箭・岸田定雄・保仙純剛・福田栄治）、建築史（岡田英男（民家担当））

○『奈良県文化財調査報告第14集（大滝ダム関係地民俗資料緊急調査報告書）』³³⁾

第二章 食・衣・住 第三章 生業 第四章 交通・運輸・交易 第五章 社会生活 第六章 信仰 第七章 人の一生 第八章 年中行事

民俗学（岩井宏實・原泰根・林宏・平山敏治郎・岸田定雄・保仙純剛・福田栄治・京谷弘胤・尾田正

幸・岸岡寛式)、建築史(岡田英男(民家担当))

○『奈良県吉野郡旭ダム関係地民俗等調査報告書』³⁴⁾

第二章 民俗資料 第三章 歴史資料 第四章 民家

第五章 植物・動物

民俗(林宏・岩井宏實ほか)、考古(藤井利章・河上邦彦)

大迫ダム、大滝ダムの報告書には、「総合文化調査」で民俗学を担当した、平山敏治郎、水木直箭・岸田定雄・保仙純剛といった研究者が参加している。有形資料に焦点をあててみると、大迫ダムの報告書には、「入之波民具」という付論が設けられており、同報告書及び大滝ダム報告書では建築史として岡田英男(昭和4年〈1929〉～平成12年〈2000〉、当時奈良県、後に奈良文化財研究所、奈良大学)が民家調査を担当している。また旭ダム報告書では、考古班が設けられ調査を実施したが、「対象地には土器等の散布は全く認められず、考古学的資料は皆無であった」という。

以上、奈良県における民俗資料、考古資料それぞれの緊急調査報告書を手掛かりとして、民俗学、考古学の接点を探ってみた。この結果、両者の接点は少なからずあるものの、文化財という制度の中で棲み分けをしている状況を確認した。

(3) 駒沢大学考古学研究室における試み

では現在の発掘調査報告書で、民俗資料や伝承が取り扱われないのかというと、すべてがそうではない。行政主体で実施される緊急発掘以外に、大学や研究機関で実施される学術発掘の報告書では、稀にそうしたことが記載される場合もある。一例をあげると駒沢大学考古学研究室による埼玉県坂戸市勝呂神社古墳の発掘調査報告書は、そのような方向性が認められる³⁵⁾。報告書では古墳の測量、発掘調査に加えて「古老ノ傳説」も紹介されている。伝承が報告書で紹介されているのは、古墳の上に神社が建立されているという現状によるものであると考えられる。古墳が神社に護られて保護されてきたことから、伝承も今に伝えられたという解釈も成立するだろう。駒沢大学考古学研究会の場合のように、緊急発掘調査で困難ならば、学術調査を契機として有形・無形の民俗資料と遺跡との関係が検討されることが望まれる。

筆者は元興寺文化財研究所に在職時、奈良県大和郡山市、橿原市での緊急発掘調査の際に、発掘により失われる調査地の民俗調査を実施した。その成果は発掘調査報告書に掲載される予定であったが、いずれの場合も諸般の事情でその結果が掲載されなかつたことは残念である。

4. 現代社会における民俗学／考古学の協業に向けて

民俗学と考古学の協業については、これまで何度も試みられてきた。しかしながら、そうした協業が一般化したとは必ずしもいえない。そこで本稿では、現代社会において協業が可能となるためには、どのような素材やアプローチがあるかをいくつかの例から考えてみよう。

(1) 地籍図の利用と民俗学・考古学

地籍図とは、土地の一筆ごとの区画、地種、地目、面積、所在地の字名と地番、あるいは所有者などを図の上に示した大縮尺の地図のことで、明治時代以降製作されてきた。これら地籍図は開発などにより、失われてしまった土地の情報を得るために、考古学者によって注視されてきた。考古学者・伊藤秋男による地籍図を用いた失われた古墳の復元的研究は示唆に富むものである³⁶⁾。ただし地籍図に現れる「塚」はすべてが高まりを示しているわけではなく、面積表示単位を意味するものも含まれていることに留意しなければならない³⁷⁾。現在、古墳研究においては、地籍図の活用は一般的なものとなっている³⁸⁾。地籍図の利用は民俗学でも可能である。考古学では古墳復元のために過去の景観や土地利用について聞き取りをするという点は、民俗学の生業研究や景観研究との共通項が発生するだろう。

地籍図と同様に地理学分野の資料としては、近世地誌の利用も重要である。よく知られるように地誌には民俗学的な情報、考古学的な情報も含まれており、しばしば参照してきた。しかしながら、これらをそれぞれが検討するのではなく、地域、小地域という単位を意識しながら連動させていくことも必要であろう。

そのような試みの一例として、考古学者で高校教員でもあった斎藤弘の活動をあげておきたい。斎藤は栃木県立学悠館高等学校歴史研究部を指導し、部活動の一環として『地誌編輯材料取調書』(1885) の翻刻をおこなった。この地誌の情報を活用しながら、栃木市皆川城内町の信仰や伝承の復元を実施したのである³⁹⁾。斎藤は中世を中心に考古学的調査研究をおこなってきたが、そうした経験を踏まえて、地誌の情報を通じて民俗学が対象とする分野についても考察をおこなったことは、非常に有意義な成果であるといえる。

(2) 民俗学と考古学を結合する近現代考古学

日本における近現代考古学は、1990年代に都市部を中心として、近世考古学の延長線上に姿を現した。考古学者・櫻井準也はメタ・アーケオロジー研究会を主宰し、近現代考古学というジャンルを一般化することに貢献した⁴⁰⁾。平成30年(2018)、櫻井の活動に影響を受けた若い世代が、近現代考古学研究会を発足させ活動をおこなっている。近現代考古学の対象は、主に地中に埋没したものが該当するが、これが地上で保管されていれば民具や民俗資料に含められる場合が多い。つまり両者は表裏一体であるともいえる。近現代考古学が進展し議論の場が拡大すれば、協業実践可能なプラットフォームとなりうるのではなかろうか。

(3) 遺跡・伝承に関するモニュメントの設置

大阪府堺市土塔（行基伝承）⁴¹⁾、奈良市頭塔（玄昉の首塚）などの古代の仏教モニュメントには古墳同様に伝承が伴い、伝承はこれらを保護してきた。仏教遺跡と伝承との関係は、アンコール、ボロブドゥールなど海外でも認められる。注目すべきは一度忘却された寺院・仏跡をめぐって、伝承が生成され語り継がれてきたという事実である。このような伝承はかつて事実無根として取りあげられるは少なかった。しかしながら、文化資源の活用の際に評価され一つのジャンルとして認められるようになってきた⁴²⁾。

江戸時代には場所の記憶を再生産する装置として、史蹟記念碑の設置が開始された⁴³⁾。つまりモニュメントを自ら作り出すことも行われるようになったのである。こうした傾向は近代以降、さらに盛んになっていった。史跡や遺跡公園に設置された記念碑に関する

研究は、極めて刺激的なもので示唆に富んでいる⁴⁴⁾。この手法を応用、拡大解釈をするならば、物質文化としての民俗系、歴史系の記念碑研究も可能ではなかろうか。

ここでは近世、近代と石碑建立により古墳が保護された事例を紹介し、記念碑研究の可能性を提示してみたい。山梨県甲府市下曾根町の甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園内に所在する丸山塚古墳は、5世紀はじめの円墳である。古墳周溝東側には三つの石碑が並び建っている（図1）。ここでは便宜的に右から左へ順に、石碑1、石碑2、石碑3と呼んでおく。石碑はいずれも碑部と基礎よりなる。

石碑1（郷民擁護碑） 碑部正面に「郷民擁護神靈の／まし満す所なりうゆまへハ／則福を降しをかせハ／すなはち祟りあらん／天保十一年八月立石」とある。安山岩製で高さ129cm、幅98cm、奥行28cm。

石碑2（丸山之碑） 碑部正面の以下の銘文がある。「（丸山之碑）／甲斐國八代郡下曾根村に塚あり里俗丸山／呼ぶのみにして由來詳ならず天保年間淨照寺／と稱する寺院の所属たりし頃時の代官某此塚／を以て郷民擁護神靈の存する所となし碑を建／てたる事あるも唯里人に尊敬すべき地たるを／告げしに過ぎず明治の初年現在の地主松野傳／四郎氏の有に歸して以来開墾を繼續せし結果／上部中央深さ約一尺五寸の所に於て埋もれた／る石あるを認め發掘の末終に幅三尺高三尺長／二丈一尺の石廓を發見し其内部より漢鏡一面／刀劍類數個を得るに至れり此に於て由來詳な／らざりし丸山は千餘年前貴人の為めに築きた／る墳墓なること明白となれり是實に明治四十年／三月四日の事に屬す



図1 丸山塚古墳の石碑

今や漢鏡は學術上の参考／品として永く東京帝國大學に保存さるゝ事と／なれり地主松野氏之を得たる地に碑を建て此／事實を後に傳へ併せて人をして此地の敬すべ／き所以を知らしめんとす誠に當を得たる舉と／謂ふべし即ち需めに應じ此記を作り且つ書す／明治四十一年九月 東京帝國大學理科大學教授 理學博士坪井正五郎 建碑者 松野傳四郎。安山岩製で、高さ200cm、幅116cm、奥行72cm。

石碑3（史跡指定碑） 碑部正面に「史蹟丸山塚古墳／文化財保護委員会／昭和貳拾九歳參月貳拾日／建之」とあり、安山岩製で、高さ123cm、幅82cm、奥行31cm。

以下、野代恵子と北原糸子の論考により石碑の概要を述べる（野代・北原 2020）⁴⁵⁾。

これらの石碑は古墳墳頂部にあったが、昭和59年（1984）に整備事業に伴って現在の場所へと移設された。石碑1は、天保11年（1840）に、市川代官所代官であった小林藤之助により建立されたものである。ここは神靈が鎮座する場であり、銘文に「祟り」とあるように崇敬すべき地であることを一般に知らしめるために建立された。

石碑2は明治41年9月の坪井正五郎による「丸山之碑草稿」をもとに、明治42年（1909）3月に地主の松野伝四郎により建立されたものである。碑文は、郷民擁護碑の存在と、明治40年3月に丸山塚古墳から発見された出土品が、東京帝国大学に保管された経緯が記されている。

石碑3の銘文については野代らの論考ではふれられていないため、筆者が現地で確認をおこなった。丸山塚古墳は昭和5年（1930）に甲斐銚子塚古墳が国史跡に指定された際に、その附指定となっている。なお昭和25年に文部省の外局として設立された文化財保護委員会は、昭和43年（1968）に改組され文化庁文化財保護部となった。

石碑1と2は、平成31年（2019）に文化財保護の精神を今に伝える歴史資料として、「郷民擁護碑及び丸山之碑」という名称で山梨県指定有形文化財となった。石碑1にあるように、古墳を敬えば郷民を擁護し福をもたらすが、むやみにあばけば「祟り」があるという

文言により、古墳は保護されたのだという。これは、柳田国男が述べたように信仰が古墳を護ったといえよう。この点で、石碑という資料を媒介として、民俗学と考古学の協業が可能となるのではなかろうか。

5. 発掘・遺跡が語り継がれる ということ

最後に、筆者と個人的に深く関係する、ある古墳の発掘を例に発掘がその後いかに語り継がれてきたかをみてみたい。岡山県久米郡美咲町の月の輪古墳の発掘は昭和28年（1953）に実施された（図2）。本発掘の特徴の一つとして地元住民も参加したという点がある。調査を主導したのは、和島誠一（明治42年～昭和46年）と近藤義郎（大正14年（1925）～平成21年（2009））であった。筆者の祖父、父など親族は住民として発掘に参加した。研究者と発掘参加者が執筆した『月の輪教室』は、発掘調査が地元住民にとってどのような意義があるかを示してみせた⁴⁶⁾（図3）。

『月の輪教室』に執筆した研究者の中には赤松啓介（本名は栗山一夫、明治42年～平成12年）がいる。赤



図2 月の輪古墳



図3 月の輪教室

赤松は晩年、民俗学者として再注目されたが、それ以前より考古学者としても知られた在野研究者である。赤松は民俗学的研究と考古学的研究それぞれの成果を個別のものとして残したが、地域史、地域の特徴という観点からすればこれら二つは相関に関係が深く、地域の要でもある。赤松は月の輪古墳にも参加したが、それ以前より考古学と民俗学を郷土研究の一部として捉えていたと考えられる。

赤松による考古学と民俗学を郷土研究の一部として捉えるという手法は、『民俗学の基礎的諸問題に就いて』で既に示されている。本書の正式な刊行は後年であるが昭和10年（1935）から昭和11年（1936）にかけて執筆され、当初は土俗趣味社の趣味叢書として刊行される予定であったという。昭和50年に赤松の本名である、栗山一夫名義で復刻されている。赤松は、昭和8年（1933）に玉岡松一郎（大正2年～平成7年）、西谷勝也（明治39年〈1906〉～昭和44年）とともに、ハリマ・フォークロア・グループを結成した。昭和11年、ハリマ・フォークロア・グループは、東播磨古墳調査委員会と合流し、兵庫県郷土研究会となった⁴⁷⁾。赤松が『月の輪教室』でもハリマ・フォークロア・グループについて言及していることは実は重要である⁴⁸⁾。

物質文化というキーワードで考古学と民俗学を結びつけるとするならば、民俗資料としての民具がまず想起されるだろう。では赤松は民具をどのように位置づけていたのだろうか。『民俗学の基礎的諸問題に就いて』では次のように言及されている⁴⁹⁾。

次に特殊産業の調査に目標をおく。次にこれらの産業から遊離したものが採取される。例えば、昔話、民間信仰、方言などがこれだ。しかし、生産過程に沿うものは別である。例えば、器具、生産方法の方言、宗教的なものであっても、農業生産と密接な関係をもってきた年中行事などは、それぞれの生産様式と共にあってのみ科学的資料たりうるのであるから、分離的採取はさけなければならぬ。要するに機械的態度をとることは間違っている。

戦前から郷土研究というカテゴリーの中では、民俗学、考古学ともに共存可能であると考えられていた。

しかし、これら両方を調査研究できる研究者、郷土史家は限定されていた。それ故に両者の協業を困難にしていったのではなかろうか。時代が下るにつれて学問は細分化、専門化されたことも大きな要因であろう。戦前段階では、考古学、民俗学ともに調査研究を実施する者は赤松以外にも存在していた。民具研究をスタートさせたアチック・ミュゼアムに集った研究者の中にも、大里雄吉（？～昭和53年〈1978〉）、武藤鐵城（明治29年～昭和31年〈1956〉）といった考古学、民俗学双方の調査研究を実践していた者も含まれていた。しかしながら対象資料はそれぞれの学問的ディシプリンの中で語られるのみで、総合的な考察がなされることは僅少であったと言わざるを得ない。現在の認識として大里や武藤は、郷土史家というカテゴリーに含められて語られることが多い。

平成30年（2018）の文化財保護法の改正により、地方自治体に文化財の管理が移管された関係で、郷土研究あるいは郷土史研究という枠組みの中で、文化財や文化資源の活用が叫ばれることが増加している。このような時代にこそ改めて、考古学と民俗学の接点を論じる必要があるのではなかろうか。

若干脱線したが月の輪古墳の話に戻ろう。発掘調査を記録した映画「月の輪古墳」（昭和29年）が製作された。映画はその後、国民的歴史運動の中に位置づけられた月の輪古墳発掘を、語りなおすツールとして使用された。また、レコード「月の輪音頭」（昭和29年）も作られた。歌唱は東京中央合唱団⁵⁰⁾、作詞は永瀬清子、作曲は箕作秋吉⁵¹⁾である。「月の輪音頭」は現在でも毎年8月15日の「月の輪祭り」で歌い踊られている。地元で「月の輪音頭」は新しい伝統となっている。しかしながら知名度が高いにも関わらず、当地は観光化されることなく、静かに地元住民を中心として月の輪の発掘は伝承されているのだ。

平成15年（2003）10月5日に、美咲町飯岡で月の輪古墳発掘50周年を記念して式典が執り行われた（図4）。当日の近藤義郎の発言にもあったように、遺跡が発掘されて50年後に記念式典が開催されることは異例のことであった。遺跡の活用を謳うのであれば、これが特異なこと、単発のことではなく他の遺跡におい



図4 月の輪古墳発掘に学ぶ

ても実践されていくことが望まれるだろう。そして願わくは、遺跡が発掘調査以降現在まで、郷土の景観の一部として、どのように活用されているのかについても議論されるべきだ。ここでいう活用とは観光資源化だけでなく、それ以外の可能性についても検討することが含まれている。

6. おわりに

月の輪古墳と関連して、近藤義郎の考古資料觀についても付言しておきたい。近藤は以下の理由から「原爆ドームは立派な考古遺跡」と考えてその保存運動にかかわった⁵²⁾。

考古資料は、時間の新古をこえて、人類が残した物的資料であり、それは原始・古代だけでなく、中世でも近代でも活用されるべきものである、といわれてから久しい。原爆ドームは、先にのべたように、日本現代史、というより人類の当面する現代史のかけのない（二度とあってはいけない）考古資料であり、戦争と平和を考える記念碑であり、人類の破壊をくいとめる決意の象徴でもある。その後、平成8年（1996）に原爆ドームは世界文化遺産に認定された。モノとして捉えるならば、原爆ドームは、広島県物産陳列館から広島県産業奨励館、そして原爆ドームへという変遷を経ている。原爆ドームは原爆の記憶を次の時代へとつなぐ施設であり、有形資料、モニュメントでもある。伝承そのものとはやや異なるが、近藤は近現代考古資料の可能性を説き、原爆ドームをめぐる歴史伝承の意義を問うたのである。

近藤が護ろうとしたのは、遠い過去の遺跡や遺物だけではなく、近い過去の遺跡・遺物もあったことを忘れてはならない。その理由と意義を、われわれは今改めて検討しなければならないのではなかろうか。

ここで概観してきたように、問題は対象とする過去の時間幅と現在と過去との関係にあるように感じられる。遠い過去は例えば日本人の起源論争などのように、自身のアイデンティティーなどと関連して興味を持つことがあるだろう。しかしながら個人差はあるものの、身近に感じることができるケースはたくさんあるとは言えない。ところが近い過去は、自身のことや家族との関わりなど接続可能な要素が多いだろう。個人の嗜好性が強調されるような傾向は、インターネットを中心として、個人が簡単に情報を検索することが可能な時代になったことも一因として考えられる。しかしながらインターネット上に現れる情報が、すべて学的根拠に基づいた正確な情報とは限らない。情報化社会であるからこそ研究者による正確な情報の発信は必要である。考古学者と民俗学者の過去の捉え方を少し変化させることにより、より身近な存在について考えること感じることが可能となるのではなかろうか。つまり近現代という時代における諸問題を共有することにより、もっとスムーズに相互乗り入れが可能となるのではないかと考える。

本稿では、筆者自身の経験などを含めて、遺跡の民俗学と伝承の考古学をめぐる諸状況の変遷とこれからについて検討を試みてみた。今回示したいいくつかの作業をこれから実践していく中から、次の段階の両者の関係が「みえる」と信じたい。将来を考えるためにには当然ながら教育が重要となる。研究者を育成していく場である、大学の専門教育の中で、民俗学、考古学それぞれが共有できる項目を設け、相互の学問を学ぶことが可能となれば、将来的に協業実践へと結びつくのではなかろうか。

本稿は、令和3年（2021）3月6日に開催された、オンライン研究会「遺跡のなかの民俗学」での発表をもとに加除筆をおこなったものである。当日参加されコメントやご教示をいただいた諸先生・諸氏に深く御礼申し上げる。

改めて学生の頃より元興寺文化財研究所在職時にかけてご指導いただいた、坪井清足先生、近藤義郎先生、金閥恕先生、佐原眞先生、水野正好先生の学恩に心より感謝したい。先生方にご指導いただく中で、「遺跡学」への興味関心が深まったことは間違いない。諸先生の思いを、しっかりと次世代に引き継ぎいでいこうと決心した次第である。また本稿執筆において以下の諸氏にご教示・ご協力をいただいた。

新里貴之、野代恵子、松野博志(五十音順、敬称略)

【註】

- 1) 柳田国男 1918 「民族学上に於ける塚の価値」『中外』2-8、pp.135-138。
- 2) 柳田国男 1928 「木思石語」『旅と伝説』1-10、pp.2-24。
- 3) 角南聰一郎 2014 「墓と説話伝承—物質文化研究の視座から」『アジア民族文化研究』13、pp.51-66
- 4) 角南聰一郎 2018 「古墳上の神仏祠—考古学と民俗学の接点」『待兼山考古学論集』Ⅲ、大阪大学考古学研究室、pp.841-854。角南聰一郎 2018 「説話伝承と古墳、その不可分な関係—両者の関係から考える文化財保護」『説話・伝承学』26、pp.15-29。
- 5) 角南聰一郎 2020 「タグリ神信仰と石造物の転用—仏教信仰物から民間信仰の対象への変容」『物質文化』100、pp.125-138。
- 6) 大嶋善孝 1999 「古墳にまつわる伝説—火塚・火の雨塚について」『信濃』51-1、pp.1-12。
- 7) 前掲(2)。
- 8) 坪井正五郎 1910 「火塚に關する疑ひを解く」『東京人類學會雑誌』25-287、pp.192-195。
- 9) 前掲(6)。信藤祐仁 1991 「第2節 甲府の積石塚古墳研究史」『横根・桜井積石塚古墳群調査報告書』甲府市教育委員会・横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会、pp.5-7。島田崇正 2006 『富加町内遺跡発掘調査報告書(平成14~17年度)』富加町教育委員会。福田祐美子 2019 「火の雨塚伝説についての一考察」『学術財研究』1、pp.180-185。
惜しまれるのは、坪井以降の火塚に関する論考では、柳田は引用されるものの、坪井については言及されていない点である。
- 10) 角南聰一郎 2020 「坪井正五郎と土俗学」『民具学事典』丸善出版、pp.18-19。
- 11) 角南聰一郎 2019 「寺院に伝わる怪異なモノ—仏教民俗学の視座」『アジア遊学』239、pp.292-307。
- 12) 梅原は発掘調査に赴いた先で、その地の伝承などを調査したことあった。また調査を担当した古墳の報告書では、以下のようにその土地の伝承についても調べ掲載している。
遂に此の古墳の封土は此の土地の土ではなく同じく水害を被らない高見にある泰産寺野から馬背で蓮ばれたものであるとの傳説を生ずるに至った。而して今なほ此地方に行はれてゐる「馬々小馬、田中の瘦せ馬士負て轄けるな」と云ふ可憐な子守歌は即ちこれに関するものであると云はれてゐる。(濱田耕作・梅原未治 1923 『近江國高島郡水尾村の古墳』京都帝国大学)
- また梅原は後に、柳田の古稀記念論文集にも、考古学論文を寄稿している(民間伝承の会編 1947 『日本民俗学のために—柳田国男先生古稀記念文集』民間伝承の会)。
- 13) 末永は戦前より、大場磐雄と親交が深かった。大場は師である折口信夫の影響もあり民俗学的著作もある、「考古民俗学」を目指した考古学者である(加藤里美・深澤太郎 2005 「解題」『大場磐雄博士資料目録 I』國學院大學日本文化研究所、pp.1-4)。奇しくも大場が末永の古稀記念論文集に寄稿したのは、柳田が問題としていた歴史時代の塚に関する考古学的研究であった(大場磐雄 1967 「歴史時代における『塚』の考古学的考察」『古代学論叢—末永先生古稀記念』末永先生古稀記念会、pp.161-176)。
- 14) 民俗学者・菊地暁は、水野は「熱烈な折口ファン」であり、民俗学と考古学とは、「対象はちがう」が「方法はよく似ている」と考えていたことを指摘している(菊地暁 2016 「民俗学者・水野清一—あるいは「新しい歴史学」としての考古学とミニゾク学」『帝国を調べる—植民地フィールドワークの科学史』勁草書房、pp.13-45)。
- 15) 斎藤は高校生の時、柳田が主幹であった『民族』を愛読していた。本誌に斎藤が民俗学的調査報告を投稿したことが縁となって、柳田の指導を受けることになった。斎藤は大学進学に際して、考古学か民俗学のいずれを専攻するかで悩み、柳田に相談したという。柳田は「考古学とか民俗学とかのような学問をやるより、まず飯の食べられる学問をやりなさい」と言われたという(斎藤忠 2002 『考古学とともに七十五年』学生社、p.26)。この助言により斎藤は教員資格の得られる日本史を専攻し、考古学の道へと入っていったのである。ある時期まで斎藤は考古資料の解釈に柳田の民俗資料を援用するなど双方の学問を往来していた。
- 16) 小林は民俗学者の著作をよく読んでいたこと、論文には柳田・折口の影響があったことなどが指摘されている(都出比呂志 2003 『小林行雄論』『森本六爾、小林行雄と佐原眞』大阪府立弥生文化博物館、pp.74-80)。
- 17) 菊地暁 2008 「京大国史の「民俗学」時代—西田直二郎、その〈文化史学〉の魅力と無力」『近代京都研究』思文閣出版、pp.553-582。
- 18) 青木政幸編 2005 『酒器物語—小林行雄・水野清一による昭和21-22年灘酒造調査の記録』辰馬考古資料館。
- 19) 坪井清足 2005 「坪井清足氏インタビュー」『酒器物語—小林行雄・水野清一による昭和21-22年灘酒造調査の記録』辰馬考古資料館、pp.193-205。
- 20) 無記名 1950 「アイヌ民族総合調査の計画」『民族學研究』15-1、p.34。
- 21) 木名瀬高嗣 2016 「『アイヌ民族総合調査』とは何だったのか—泉靖一の「挫折」と戦後日本の文化人類学」『帝国を調べる—植民地フィールドワークの科学史』勁草書房、pp.165-198。
- 22) 戦後、刊行された総合調査報告書として、青島総合調査委員会による『青島総合調査報告書』と鏡野町総合調査団による『鏡野町総合調査報告書』がある(青島総合調査委員会編 1954 『青島総合調査報告書』宮崎リンネ会、鏡野町総合調査団編 1958 『鏡野町総合調査報告書』鏡野町)。前者の調査対象は、宮崎市青島の自然環境・貝塚、植物、動物、人文社会であった。後者は主に岡山大学教員が執筆しており、岡山県苦田郡鏡野町の地理学、考古学、農学、歴史、医学が対象となった。考古学の部分を執筆したのは近藤義郎である。
- 23) 坂野徹 2012 「フィールドワークの戦後史」吉川弘文館、p.163。
- 24) 奈良県教育委員会編 1952 『奈良県総合文化調査報告書第1(都介

野地区)』奈良県教育委員会。

- 25) 九学会連合による第1回調査として対馬調査が実施された。昭和25年度対馬共同調査委員会には、日本人類学会所属として蒲生正男(広島県立医科大学副手)、日本民族学協会所属として宮本常一(日本常民文化研究所所員)の名がみえる(前掲(24))。
- 26) 奈良県教育委員会編 1953『奈良県総合文化調査報告書第2(吉野川流域(竜門地区))』奈良県教育委員会。
- 27) 奈良県教育委員会編 1954『奈良県総合文化調査報告書第3(吉野川流域(宇智郡大阿太村・南阿太村より上流の吉野川流域十ヶ町村))』奈良県教育委員会。
- 28) 御勢久右衛門(大正15年(1926)~平成18年(2006))は本書で「吉野川漁具及び漁法追補」(pp.227-229)を執筆している。御所は奈良青年師範学校卒の生態学者で、奈良産業大学教授を務めた。民俗学や考古学以外の自然科学系研究者によって、民具に関する報告がなされていることは大変興味深い。御所の民具への関心は農学者による農具研究と比較することが可能であろう。
- 29) 奈良県編 1925~1941『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會報告』奈良県。京都帝國大學文學部考古學教室編 1943『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會報告』16、桑名文星堂。奈良県史蹟名勝天然記念物調査會編 1944『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會報告』15、桑名文星堂。
- 30) 奈良県編／奈良県教育委員会編 1936~1966『奈良縣史跡名勝天然記念物調査抄報』1~17、奈良県教育委員会。
- 31) 奈良県教育委員会編 1951『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』権原遺跡調査報告書刊行会。
- 32) 奈良県教育委員会編 1968『奈良県文化財調査報告第11集(大迫ダム水没地民俗資料緊急調査報告書)』奈良県教育委員会。
- 33) 奈良県教育委員会編 1970『奈良県文化財調査報告第14集(大滝ダム関係地民俗資料緊急調査報告書)』奈良県教育委員会。
- 34) 奈良県教育委員会編 1975『奈良県吉野郡旭ダム関係地民俗等調査報告書』関西電力株式会社。
- 35) 杉山敬太ほか編 2017『勝呂神社古墳第1次発掘調査概報』駒沢大学考古学研究室・坂戸市教育委員会。杉山敬太ほか編 2018『勝呂神社古墳第2次発掘調査概報』駒沢大学考古学研究室・坂戸市教育委員会。
- 36) 伊藤秋男 2010『地籍図で探る古墳の姿(尾張編)―塚・古墳データ一覧』人間社。
- 37) 前掲(37)。加藤隆志 1997「面積表示単位の消長―「塚」を巡って」『民俗学論叢』12、pp.41~57。
- 38) 土生田純之 2014「地図・地籍図の描かれ方」『古墳の見方』ニューサイエンス社、pp.16~24。
- 39) 斎藤弘編 2020『栃木市皆川地区的歴史』随想舎。
- 40) メタ・アーケオロジー研究会編 2004『近現代考古学の射程—今なぜ近現代を語るのか』六一書房。櫻井準也 2004『モノが語る日本の近現代生活—近現代考古学のすすめ』慶應義塾大学教養研究センター。櫻井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房。
- 41) 藤井直正 1988『行基の足跡』『大手前女子大学論集』22、pp.53~79。根本誠二 2005『行基伝承を歩く』岩田書院。
- 42) 井尻進 1924『ボロブドゥル』大乗社。鏡味治也 1994『インドネシアの「文化財」政策とバリ島での文化遺産の活用』『金沢大学文学部論集 行動科学科篇』14、pp.119~143。丸井雅子 2014『口頭伝承と文化財—アンコールの寺院と地域社会の共生』『新田栄治先生

退職記念 東南アジア考古学論集』新田栄治先生退職記念論集編集委員会、pp.91~98。

- 43) 羽賀祥二 1998『史蹟論—19世紀日本の地域社会と歴史意識』名古屋大学出版会。
- 44) 櫻井準也 2016『考古系造形物の世界』『東邦考古』40、pp.180~189。
- 45) ここでは記念碑を中心に紹介し全体については概要を示すにとどめる。詳細は野代恵子と北原糸子の論考を参照されたい(野代恵子・北原糸子 2020「神靈が護る古墳と地域—郷民擁護碑と丸山之碑に見る文化財保護の精神」『山梨県考古学協会誌』27、pp.137~142)。
- 46) 美備郷土文化の会・理論社編集部編 1954『月の輪教室』理論社。
- 47) 栗山一夫 1975『民俗学の基礎的諸問題に就いて』兵庫県郷土研究会。
- 48) 赤松啓介 1954「ああ、私の夢が実現された」『月の輪教室』理論社、pp.184~192。
- 49) 前掲(48)、p.44。赤松は有形民俗資料を意味する語として、「民具」ではなく「器具」を用いている。渋沢らによる民具という語の使用開始が1936年であるので、赤松は直接「民具」という語を用いていないものと考えられる(アチック・ミューザム編 1936『民具蒐集調査要目』アチック・ミューザム)。
- 50) 中央合唱団は共産党系の青年組織である、日本共産青年同盟の音楽部門として昭和23年に結成された。うたごえ運動の実態は以下のようなものであった。①みんなで歌うという行為に活動の重点を置いていたこと、②平和を追求するような思想を持ち、そのような歌を歌っていたこと、③ロシア音楽や日本民謡を特にレパートリーとしていたこと(河西秀哉 2013「うたごえ運動の出発—中央合唱団『うたごえ』の分析を通じて」『神戸女学院大学論集』60-1、pp.75~91)。
- 51) 津山藩医で蘭学者・箕作阮甫(寛政11年(1799)~文久3年(1863))の曾孫、ちなみに箕作阮甫の孫・直子は坪井正五郎夫人である。
- 52) 近藤義郎 1985『広島原爆ドームを史跡に』『考古学研究』125、p.3。

【参考文献】

- 共同研究『月の輪古墳』編集部編 1960『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会
- 桑原公徳 1976『地籍図』学生社
- 近藤義郎 1998『月の輪古墳』吉備人出版
- 斎藤忠 1927『陸前宮戸島記事』『民族』2~4、pp.163~166
- 斎藤忠 1932『古墳の崇り』『ドルメン』1~8、pp.43~47
- 斎藤忠 1934『猪垣遺蹟考』『歴史地理』63~4、pp.1~17
- 櫻井準也 2011『歴史に語られた遺跡・遺物—認識と利用の系譜』慶應義塾大学出版社
- 角南勝弘 2003『月の輪古墳発掘50周年を迎えて—温故知新』『考古学研究』50~2、pp.105~106
- 角南勝弘ほか 2003『月の輪古墳発掘に学ぶ』月の輪古墳発掘50周年記念祭実行委員会
- 角南勝弘・澤田秀実編 2008『月の輪古墳発掘に学ぶ—増補 改訂版』美前構シリーズ普及会
- 柳田国男・草間流水 1927『猪垣のこと』『民族』3~1、p.154
- 和島誠一 1954「あとがき—月の輪古墳発掘の学問的意義を中心に—」『月の輪教室』理論社、pp.227~245

図版典拠

- 図1 筆者、令和3年7月18日撮影
図2 角南勝弘、令和3年2月26日撮影
図3 美備郷土文化の会・理論社編集部編 1954（前掲（46））
図4 角南ほか 2003